

隨想 胡蝶の夢

藤村の詩に『胡蝶の夢』というのがある。

胡蝶の夢の人の身を

旅といふこそうれしけれ

とよあめつち
常世に長き天地を

宿といふこそをかしけれ

この題はもとより中国の故事、莊周が夢に胡蝶となつて、物と我との区別を忘れ、物我一体の境地に遊んだことに由来する。人生のはかなさを胡蝶の夢にたとえたのである。芭蕉もまたこの故事から次の一句を詠んだ。

櫻庭 信之

起きよ起きよ我が友にせん寝る胡蝶

さて、胡蝶ということばには文語的雅樂的ひびきがある。胡には、野村胡堂の「あらえびす」、「とづくに」、そしてまた「はかないもの」という意味がある。蝶とは、「薄いひら(片平)」のことで、「ひらひら」と飛ぶ形容は、いかにも蝶の舞いの軽やかさとはかなさを写し得て妙である。昔の「てふてふ」にも「ひらひら」に似た軽やかさを感じられて捨て難い。過日私は金沢の街で、たまたま「てふてふ(蝶々)」という看板の小料理屋を発見した。今ではひらがなに漢字でルビをふるのか、「てふてふ」ははやれっ

きとした古典なのだ。私は未だ見ぬ女主人のお蝶^{てふ}さんに何となく親しみを覚えたのである。「ちようちよ(う)」は蝶の愛称で、童謡のちようちよは菜の葉から桜の花へ飛ぶ。花から花へ(from flower to flower)といえ、英語でも蝶を意味する。春の風に浮かれてひらひらと舞う蝶の姿を、日本の俳人たちはどのように表現しているのだろうか。

蝶の舞落つる椿にうたるるな 闇指

大原や蝶の出て舞ふ朧月 丈草

風の蝶^{とふ}きえては麦にあらはる、 青羅

蝶の飛^{とふ}ばかり野中の日影かな 芭蕉

野を低く遊ぶ胡蝶や葦草 吟江

春風や蝶のうかる、長廊下 林江

草刈を追ひ行く蝶や日の麗^{うらら} 亀岳

青空やはるばる蝶のふたつづれ 北枝

また次の句には、動きとともにユーモアさえ感じられる。

てふてふや花盗人をつけてゆく 也佐

たんぽぽにはやされて舞ふ胡蝶かな 作者不知
猫の子の組んずほぐれつ胡蝶かな 其角

其角の句を色彩豊かに詠んだのが次の句である。

ぼうたんやしるかねの猫^{こがね}黄金の蝶 蕪村

牡丹の静をめぐる猫と蝶の動きが、赤白黄の三色によっていつそう感覚美をかもし出している。

ではここで、英語のバタフライの持つイメージを、日本の俳句と比べながら分析してみよう。

花を吸ふ胡蝶は百合に吞まれけり 立園

秋をへて蝶もなめるや菊の露 芭蕉

このように日本の夏の蝶は花を吸い、体力の衰えた秋の蝶は菊の露を求める。それに比べて英語ではどうしてバタフライなどと、バタ臭くなったのであろうか。実は英語の butterfly はドイツ語の直訳なのである。ドイツでは魔女

がチョウに化けて、農家のバターやミルクを盗み回るとい
う迷信があつて、それから「バターをなめる昆虫（ハ
エ）」という意味で、ブッターフリーゲ（Butterfleege）と呼
んだ。「バタバエ」である。さすがにヨーロッパはバタ臭
い。イギリスにもチョウに関する迷信はある。それは洗礼
も受けずに死んだ子供のさ迷える靈魂であるという。水子
の魂とでもいふべきであろうか。

夜かよう蝶あはれなり魂祭^{たままつり}

關東

という句にや、その感じが出ている。またイギリスのある
地方では、春先の初蝶が白ならば吉で、一年中パンが食べ
られるが、黄ならば凶で、その年は黒パンにしかありつけ
ないという迷信も残っている。しかし、

初蝶来何色と問ふ黄と答ふ

虚子

の句には、三月五日の啓蟄のころ、初蝶を見たという喜び
が強く、不安感などは感じられない。しかし英語のバタフ
ライにはある種の不吉な予感が伴うのである。成句で

“have butterflies in the stomach”とは、「不安感・動悸」を
意味する。これらは英語のバタフライに付きまとう暗いイ
メージであるが、「早朝のチョウは好天のしるし」という明
るい面もある。またバタフライは陽気の象徴で、享楽を追
う派手好みの人というイメージもある。

山の鐘蝶は罪なく見ゆるなり

一茶

この蝶は上野は奥山の花に酔う束の間の自由を楽しむ遊
女なのであらう。英語のイメージからすれば、この蝶は黄
でなければならぬ。『マクベス』の地獄の門番の台詞——
“all professions that go the primrose way to the everlasting
bon fire”——桜草の花咲く道を浮かれながら、永劫消え
ぬ火葬場へやってくる職業という職業——ここでシェイク
スピアがいうプリムローズとは淡黄色の桜草で、英語にお
ける黄色は「道楽」の象徴である。従つて“primrose way”
とは快樂の道なのである。『浮世小路』とでもいふべき
か。

酒くさき人にからまるこてふかな

嵐雪



ウィリアム・ホガース
『マッキンノン家の子供たち』

この句の蝶もまた黄色でなければならぬ。さらに英語のバタフライには、「移り気の人」、「気まぐれ女」、「女のおしゃれ」のイメージも含まれている。さしずめ日本のファッション界の女王モリハナエの蝶が連想される。しかし日本でいうかげろうのように、英語のバタフライにも「短命でうつろいやすいもの」というイメージがあつて、中世以来今日まで伝わっている。その寓意をわれわれはいまイギリスの社会諷刺画家ホガースの風俗画に見ることが

できる。

それは『マッキンノン家の子供たち』（二七四二）という油彩で、ダブリンのナショナル・ギャラリーにある。

この絵では、アダムとイブが知恵の木をはさんで立っているように、王様への忠誠を象徴する等身大の向日葵の花を中央にして、左方に十七歳の娘（姉）が椅子に座し、右方には十四歳の少年（弟）が立っていて、いま向日葵の花にとまっている蝶をつまみとろうとしている。少年は禁断の木の実ならぬ「幼年期のはかなさ」の象徴である蝶を、自らの手でつまみとろうとしているのだが、傍らの小犬が驚いて振り向いているのは、人間の愚かさや先見の明のなさをも揶揄しているのかもしれない。ホガースの絵における dog は裏を返せば god なのである。Dog knows. 犬は下から人間を見上げて見下げている。

一方少女の白い絹のエプロンには、ホガースが主張する美の曲線——へび状の曲線（the serpentine line）が見えるが、その中には早くも散った数片の花びらがかき集められていて、心なしか十七歳の娘の眼差しには、失われた楽園（the lost Garden of Eden）への哀愁がただよっている。これはキリスト教的寓意の伝統なのであるが、画家ホガースは

ここで特に幼年期のはかなさを蝶によって象徴しているのである。「子供とははかないもので、束の間の存在なのである」という觀念が、ホガースの子供中心の風俗画では一様に強調されている。娘がかき集めた向日葵の花びらを見ると、

ばたむ散てうちかさなりぬ二三片 蕪村

という句が思い出される。早くも無機物と化して、土の上に打ち重なった花びらへの凝視、そこには牡丹の生に寄せる無限の愛惜と、人生のはかなさに対する無常感——*vanitas vanitatum* (空の空)——が重く垂れこめているのである。仏教でいう「色即是空」も、キリスト教でいう「空の空」も、等しく世のむなさしさを託つのである。

幼年時代の短さといえは、ここで再び藤村の『胡蝶の夢』を思い出す。

かんばせの花紅き子も

あはれや早く翁顔

.....

人の命を児童の 噺戯と言ふは誰が言葉
賤も聖も丈夫も 児童ならぬものやある

この最後の行は、『エリア隨筆集』で有名なチャールズ・ラムのことは——“Even the lawyer was once a boy.”——厳しい裁判官でも、かつては少年だったのだ——を想起させる。少年時代の思い出といえは、ウィリアム・ワーズワスの『蝶に寄せて』(To butterfly, 1802)という短詩がある。

I've watched you now a full half-hour.

Self-poised upon that yellow flower;

And, little butterfly! indeed

I know not if you sleep or feed.

How motionless!——not frozen seas

More motionless!...

汝を睽視て はや小半時

かの黄なる花に巧みにとまる。

かわいい胡蝶よ、まことに汝は

眠っているのか吸うているのか。

みじろぎもせで——かの凍てし海とて
かくも動きを止めえまい。……

This plot of orchard-ground is ours;

My trees they are, my sister's flowers;

Here rest your wings when they are weary;

Here lodge as in a sanctuary!

この果樹園はわがもののぞ、

木々もわがもの、花はわが妹のもの。

疲れなば汝が羽、ここに憩わせ、

隠れ家のごと、ここに宿れかし。

無心に眠る蝶の姿を、イギリスの詩人は、“How motionless”と表現しているのだが、それに対して私は訳すべきことを知らない。それは次の蕪村の二句が美事に表現しているからである。

釣鐘にとまりて眠る胡蝶かな

うつ、なきつまみ心の胡蝶かな

半時もじっとして動かない蝶に対して、ワーズワスは真面目に驚いているのだが、次の二句はそれをユーモラスにつき離してみせる。

睡ル蝶夜ル夜ル何をすることぞ 其角
吹度ふくもに蝶の居なおる柳哉 一笑

ユーモラスといえは、雪村の『竹虎図』がある。笹の葉とまちがえたのでもあらうか、虎の尾の先端に止った無心な胡蝶を、虎がギョロリと大きな眼をむいて振り返っている。虎の尾の静は一瞬にして動となる。その一瞬のサスペンスに息を吞む虎と無心の蝶の組合わせが何ともユーモラスである。しかし蕪村の次の句には、ユーモアというよりは権力争いの空しさ、同族相食む人間の愚かさが強調されている。この蝶はホガースの絵で、人間の愚かさを諷刺する小犬の役に近い。

伏勢くせの鏝しころにとまる胡蝶かな 蕪村

さてここで再びワーズワスの詩に戻って、その最後の六行を引用しておこう。

Come often to us, fear no wrong;
Sit near us on the bough!

We'll talk of sunshine and of song,
And summer days, when we were young;

Sweet childish days that were as long
As twenty days are now.

しばしば来たれ、恐れずに。

われらが近くの枝に止まれかし。

されば語らん、陽光と童謡と

若かりし日の夏のことども。

樂しかりし童の一日は

今の幾多の日々に値せん。

詩人はいま他の小鳥たちに追われて逃げまどう蝶を、昔の罪人が一時の憩いを求めたという教会の避難所と思つてわが庭へ飛んでこい、と呼びかけているのである。さらに『蝶を追う知更鳥に』(The Redbreast Chasing the Butterfly,

1802)という詩の中では、可憐な蝶を追うロピンを戒めて、蝶を追うのは止めよ、夏の空の下、花から花へ飛ばしておけ、それだけが蝶の望みなのだ、「蝶はわれらが夏の喜びを分かち合う友なのだ」(“He is the friend of our sunny gladness.”)と歌っている。

蝶々も来て乳を吸ふや花御堂

也有

という句がある。四月八日は灌仏会かんぶつえで、釈迦の像に甘茶を注いで供養し、屋根を花で飾る花祭りの日でもある。この花御堂こそは仏教的サンクチュアリーなのである。はかなく弱々しい蝶の身の上を哀れむ気持は次の句にもよく読み込まれている。

日あたりのよき薬園や秋の蝶

一具

昼ごろの蝶あたたまれ鶏頭花

光少

芋の葉に蝶の夫婦や秋日向

定雄

北国のイギリスでは蝶は夏の日の友として歌われるが、

わが国の蝶はほとんど四季を通じて俳諧に登場する。日本の八月、九月の蝶は右の句にあるようにもう秋の蝶である。

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな 龍之介

の句に感じられるうだるような七月を過ぎると、もう日本は秋である。

名月や 懷みとこころに入る秋の蝶

馭承

涼しくなると蝶の体力は次第に弱くなってくる。秋から冬にかけての蝶に対する俳人たちの思いやりは、温かくもまた愛かなしい。それは人生のはかなさを託っているからである。秋から冬にかけて生き延びた蝶の哀れさを次の句はしみじみと感じさせる。

もとめても舞ふ空はなし秋の蝶 李翠
雨やどりしたま、飛ばはず秋の蝶 鳳朗
秋の蝶一葉ひとはと散るや夢の中 一桐

そして冬が来るのだが、日本の蝶はまだ生きている。

行く秋や馬糞に落つる蝶の殻 成美
枯芝や風に吹かれて蝶の飛ぶ 阿久里
冬の蝶白とも黄とも見れば見ゆ 余瓶

この最後の句には、渡辺勉氏の英訳と注がある。日向の垣根にとまってじっと動かない冬の蝶。——It is graceful, delicate, and even pitiable. (優雅で、繊細で、哀れですらある)

A butterfly in winter
Seems to be white

Or yellow. — Yohai (『季語』成美堂)

そしていよいよ十二月ともなれば、

冬の蝶存シきられぬ別れかな 斜嶺
つまあればなほあはれなり冬の蝶 子堂
落つる葉に撲たる、冬の胡蝶かな 几董

石に蝶もぬけもやらで凍てしかな 白雄

哀れな蝶の最期である。「生者必滅会者定離」、「わか
よたれそつねならむ」——イギリスの詩人コールリッジ
も、To meet / To love / And to partと歌った。それを子
規は『胡蝶』という詩で、胡蝶と堇を人間の夫婦にたとえ
て、そのはかない一夜の契りに限りない無常感をただよわ
せているのである。

胡蝶 子規

一もと堇もの思ふ
ゆふべ胡蝶の舞ひ落ちぬ
しきりに蝶はさ、やきつ、
嬉しげに花はうなづきぬ。
飯の契りに紫の
露をこぼして別れけん。
再び蝶は帰り来ず、
堇は終に萎みけり。

右の詩に歌われた胡蝶と堇の関係を、ドイツの詩人は小
川の流れとわすれなぐさにたとえている。上田敏の名訳が
ある。それは無常であり非情である。

わすれなぐさ 上田敏訳

ながれのきしの
ひともとは、
みそらのいろの
みづあさぎ、
なみ、ことごとく
くちづけし
はた、ことごとく
わすれゆく。

さて結びとしてわれわれは再度藤村の『胡蝶の夢』に返
らねばならぬ。

胡蝶の夢の人の身を 旅といふこそうれしけれ
とこよ 常世に長き天地を 宿といふこそをかしけれ

青き山辺は吾枕

花さく野辺は吾衾わかしとね

星縫ふ空は吾帳とばり

さかまく海は吾緒琴をこと

いずこよりとは告げがたし

いずこまでとは言ひがたし

いま日の光いま嵐

来る歓楽たのしみ哀傷かなしみの

人のさかりをかりそめに

夏といはむもおもしろや

あゝわれひとの知らぬ間に

心の色は褪せ易し

胸うち掩ふ緑葉みどりばの

若き命もいくばくぞ

かんばせの花紅き子も

あはれや早く翁顔

.....